

日本パーソナリティ心理学会第24回大会
シンポジウム
「心理学におけるマルチメソッド・アプローチ」

指定討論 山田 剛史
岡山大学大学院教育学研究科
tyamada@okayama-u.ac.jp

長谷川先生のご発表

- 臨床心理学におけるマルチメソッド・アプローチ
 - 反する研究を例に挙げて
- マルチ・メソッド
 - 面接法
 - 質問紙法
 - 準実験的研究
 - 介入研究

鈴木先生のご発表

- 教育心理学におけるマルチメソッド・アプローチ
 - 教育評価研究を例に
- マルチメソッド
 - 質問紙法(横断的・縦断的)
 - 実験室実験
 - 実験授業

なぜマルチメソッドアプローチ?

- 長谷川先生
 - 「介入研究の限界点の認識」から、「測定方法の洗練の重視」へ、ご自身の問題意識の変化
 - 介入研究(長谷川, 2013a)の限界:どの手続きが効果を引き起こしたのか絞りこめず
 - 反すうのメカニズムの特定を目指す:アセスメント方法の洗練
 - **複数の手法で同一の構成概念を測定**
 - 反すうの測定:質問紙と面接課題
 - 社会的問題解決の有効性:質問紙と行動的指標

なぜマルチメソッドアプローチ?

- 鈴木先生
 - 問題(Research Question)に応じた研究方法の選択
 - 大きな問題設定(RQ): 適切なテスト観の形成(テストを学習改善のために活用させるためには)
 - そのために必要な情報を集める
 - フィードバックの活用の実態把握: 実験室実験
 - 動機づけ・学習方略の規定要因の特定: 質問紙法(縦断的調査)
 - 効果的なテスト運用の提案(ループリックの活用の効果を検証): 実験授業

複数の手法で結果が異なつたら

- 長谷川先生
 - 複数の手法で同一の構成概念の測定を行い、結果が一致しない場合、「どこかに誤りがある」と考える（スライド18枚目）
- 鈴木先生
 - 各研究の問題設定(RQ)が異なるため、結果の一一致・不一致という評価はそぐわない？

Mixed Methods Approach

- 量的研究と質的研究とを統合するアプローチ
 - 長谷川・鈴木両先生の発表とは目的が異なる
 - 長谷川・鈴木両先生は、量的研究を様々な研究法で行っている
- John W. Creswell Mixed Methods Research
 - <http://johnwcreswell.com>
 - Mixed Methods について豊富な情報を提供

Mixed Methods Approach

- Creswellの書籍が日本語に翻訳されている
- Creswell, J. W. (2013). *Research design(4th ed.): Qualitative, quantitative, and mixed methods approaches*. Thousand Oaks, CA: Sage Publications.
 - 研究デザイン-質的・量的・そしてミックス法 操 華子・森 崇 訳 日本看護協会出版会
- Creswell, J. W., & Clark, V. L. P. (2007). *Designing and conducting mixed methods research*. Thousand Oaks, CA: Sage Publications.
 - 人間科学のための混合研究法-質的・量的アプローチをつなぐ研究デザイン 大谷順子 訳 北大路書房

Systematic Review and Meta-analysis

- 複数の研究結果を、統計的な方法を用いて量的に統合する
 - e.g., 山田剛史・井上俊哉(編著)(2012). メタ分析入門
-心理・教育研究の系統的レビューのために 東京大学出版会
 - http://psychmuseum.jp/showroom.html#show_08
- 問題の定式化(formulating the problem)
 - メタ分析で扱うRQを設定
 - メタ分析の対象となる構成概念の概念的定義・操作的定義
 - 扱うRQが広すぎると→ apples and oranges problem

お二人へのコメント

- 「どのようにして複数の方法論を習得してきた」
(日本パーソナリティ心理学会第24回大会プログラム, p. 19) のでしょうか?
 - 心理学を研究する学生の教育という視点に立つと、心理学研究法についての理論と実践をどのように指導していくけば良いのか
 - 学生の自己鍛錬に任せると指導教員がサポート?
- ご自身の個々の研究成果の統合について、どのようにお考えでしょうか?
 - Systematic or narrative?
 - そもそも統合することが必要と考えている?

長谷川先生へのコメント

- MEPSの採点方法(31枚目): 参加者毎に有効な方略の数と方略の有効性(1-7点)の平均値を算出した
 - 有効な方略か否かの判断基準, 有効性の段階の評価基準は? → 有効でないと判断された方略(0点の方略)は, カウントされない? 1点と0点の境目は?
- 行動的指標の結果のまとめ(36枚目): 理論的に見て一貫性に欠ける結果が得られた。ここまでに提示した研究の中には, どこかに誤りがある?
 - 確かに「誤り」かもしれないが, かなり厳しい評価では? 標本誤差などの可能性は?
 - 同一 or 類似の構成概念を測定する質問紙 → 問題解決に対する実際の行動を測定している? 回答者の意識?
 - 「誤りがある」と考えたその後はどうする?

鈴木先生へのコメント

- 問題に応じた研究方法の選択(36枚目)
 - 大きなRQの元に、個々の小さなRQが設定されている印象
 - その個々のRQに応じて、適切な研究方法が選択され、研究が実施されている
 - 同一のRQに異なる研究方法でアプローチするということは考えている?
- 大きなRQを実現するために
 - 適切なテスト観の形成(テストを学習改善のために活用してもらう)、そのためには?
 - これまでの研究成果を踏まえた上で、次の一手は?